俺と魔術と異世界で

リウク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と魔術と異世界で

【Ｎコード】

Ｎ６２２６Ｇ

【作者名】

リウク

【あらすじ】

ある出来事から精霊が見えるようになった結城だがその見える力はただ見えるだけではなく次第に会話も出きるようになってしまう

俺と魔術と異世界で

結城「・・・・・・眠い・・・・・・・・・・・・」

暗い部屋で目にクマを作らせて一言

そして部屋の机には魔術の道具

結城「ッチ・・・、学校めんどくせぇ～・・・・」

結城は時計を見てまだ時間があるか確認してから着替え始めた

テキパキと準備を済ませて学校にいく

学校につくといつものが始まる

生徒「あ!、オタクが来たぞ～～」

生徒「オタクだオタクだ!!」

結城（またか・・・、ていうかこいつ等はオタクを根本的に間違ってる・・）

結城は外見からしてオタクに近いかっこうなので学校に来る度にバカにされる

そしていつものように

妃「あんたらまたやってんの!?、いつまでもしつこいわね～!!

！」

大抵の生徒は

生徒「き・、妃ちゃん！？、何でまたそんな奴と・・・・・」

っと毎日のように繰り返されてる

生徒達は黙り込んでさっていく

結城「・・・・ありがと」

妃「ん？、・・・あぁ、いいのいいの気にしないで」

と、いつも言い返す

結城（俺だって好きでこんなのやってない・・・、なんで俺が・・・・）

結城はあるキッカケで通常の人生から魔術人生に変わった

三年前、小学5年生の時の修学旅行の時に流星群を眺めていたらいきなり星が頭にぶつかり目覚めると

隣に精霊がいた

この時から人生の歯車が代わり始めていた

こんなこともあったな見たいな顔で思い出す

そうしているうちに6時間目は終わって家に帰った

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

俺と魔術と異世界で　第二話「儀式」

学校の帰り道、妃が近づいてきた

妃「今朝のは気にしなくてもいいんだからね？」

心配してるんだろうか、だが結城にとってはどうでもよかった

結城「あんなの気にしてない、低能や幼稚な奴等が言うことだ」

妃「ヤバくなったらちゃんと言うんだよ？」

結城「わかった、わかった・・・・」

そういって少しの沈黙が続き妃が

妃「そうだ！、今から結城君の家行っていい？」

結城は頭の上に！？の文字が浮かび、少し考えて

結城「いいが、つまらんぞ？」

妃「うん！、そんなの気にしない！！」

目をキラキラさせて言う

数分歩き結城の家に到着

妃「おじゃましまーす」

妃が大きな声で言う

結城「いらっしゃい・・」

妃「あれ?、親は?」

結城はすこし黙って

結城「二人揃って家でかな?」

この言葉の意味を悟る妃

妃「・・・ごめん・・・ね?」

結城「気にしねぇって・・」

妃「そう?・・・そうだ!!、部屋何処!?」

結城「上だよ・・・、あがってすぐの角をまがったら部屋があるから・・・・」

そういうと早速二階に上がって行った

結城「飲み物っと」

飲み物を入れて上に上がっていくと

結城「飲み物だぞ」

妃がいない・・・・・・・

結城「妃?、・・・・・・・何処行った?」

部屋が荒れている、机の魔術道具が全部下に落ちていた

結城「これ、・・・・いつ落ちたんだ?、あんだけ安定下場所に置いたのに」

カリ・・・・カリ・・・・・

部屋に居た精霊が鉛筆で何かを書き始めた、喋れない上に小さい、ということで描きずらそうだ

結城「ん?、・・・・き・・・え・・・た・・・?」

頭の中で整理しようとして、ある言葉が一つ思いついた

結城「もしかして、・・・・・道具勝ってに触った？」

カリ・・・・カリ・・・

また何かを書き始めた

結城「道具の絵？、・・・これと、これと、これと、これか・・・・」

手に取ったのは　魔方陣のかかれた布のシート、五百円玉、誓文の
かかれた契約用紙だ

これでどうしたんだ？、と思いどうしようと考え込む

ひとまず、その道具を適当に置いてみた

反応が無い・・・・・・

精霊が必死になって何かを書く

結城「中心に五百円をか・・・・」

中心に置くがなにもない

そうしていると

精霊「♪〜〜〜〜♪〜〜〜〜♪」

結城「!?」

五百円玉が激しく回る

ブン!!

結城「ウワワァァァーーーーーーーーーーーー!!!!!!・・・・
・・・」

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

俺と魔術と異世界で　第三話「街」

結城「・・・・・・ぅ・・・・・ん・・・・・・？」

結城はここは何処だと辺りを見回す

結城「・・・・・・！？」

そこには、妃と見知らむぬ青年

結城「妃と・・・・・誰？、ていうかここ何処？」

すると眠っていたのやら気絶していたのやら知らないが、青年がムクリと起きた

青年「・・・・・ふぁ～、・・・・・おぉ！！、結城！！、もう起きてたのか！？」

？

結城（こいつ俺の事ってんのか？）

結城は恐る恐る

結城「・・・・俺の事知ってるのか？」

ゼルト「あぁ、そうかあっちの世界ではちっこかったもんな、俺はゼルト、本名はゼルト・イービアスだ、ゼルトって呼んでくれ」

結城「・・・・・もしかして、・・・・あの精霊？」

ゼルト「正解！！！、そのとうり！！」

妃「・・・・くぁ～・・・・」

今の声で妃が起きてしまった

妃「ん～、・・・・ここ何処？」

っと、一言ボ～っとした声で言った

結城「さぁな、てか目を覚ませ」

数秒して現状が分かったのか妃が焦り始める

妃「え！？、ここ何処！？、ていうか、あなただれ！？」

結城は手を頭に当ててため息をつく

ゼルト「おはよう、俺はゼルト・イービアス、ゼルトって言ってく

れ」

結城はこのままじゃどうしようもないと思って

結城「ここら辺には森しかないのか？」

ゼルト「街があるぜ？」

結城「じゃあそこにいこう」

ゼルト「まぁ、もともとその街にいくつもりだし」

結城「？」

妃は深呼吸して何とか話に乗ろうとしていた

妃「・・・・今から何処いくの？」

結城「今から街にいく」

妃「そ、そうなの・・・・？」

結城「そうなの」

ゼルト「いこうか」

ゼルトを先頭に森を抜ける

すると大きな塔が見えてきた

結城「何だ?、アレは?」

妃「すごい・・・・」

と二人は唖然していた

ゼルト「ついたよ」

と、街に足を踏み入れた瞬間に

ガチャガチャガチャ

武器を向けられる

結城「なんだ!?」

俺と魔術と異世界で　第四話「伝説」

兵「そこの男たち！、止まれ！！」

間から一風変わった鎧を着た女が出てきた

ゼルト「・・・・あ、・・・・シキか！」

兵は、ハ！、と一言言って近づいてきた

シキ「お前・・・・ゼルト・・・・か？」

シキは兜を外して言う

結城「知り合い？」

妃「綺麗・・・・」

ゼルト「ただいま、シキ！、ランクは・・・レイトになったのか！！」

ゼルトは親しげな口調で聞き返す

シキ「あぁ、・・・・帰ってきたとなると・・・・」

ゼルト「そうだ、見つかった、・・・・二人には会ってほしい人がいる来てくれ」

結城「・・あ、・・・・あぁ」

妃「わかりました」

歩いて数分位して着いたのは広場だった

結城「何もないぞ？」

ゼルト「待ってろ、・・・・・・リード！！」

その言葉を言った瞬間に　空間に白い扉が出現した

妃「え！？、・・・これどうなってんの？」

結城「空間転移魔術か・・・・？」

ゼルト「よく知ってるね、これは超一般的に使われるやつ、君たちが来た時に使ったのは、上位の方だけどまだあるんだ」

妃「・・・・・」

扉に入ると王室の様な所に出ていた

ゼルト「ただいま魔道術師ゼルト。イービアス帰還した！！！」

ゼルトの「声が王室で響き渡る」

？「よく帰ってきた、ゼルト、見つけてきたのか？」

ゼルト「はい、オルガ・リルドス様、結城、妃です」

オルガ「ゼルトは妃殿と下がれ、・・・結城、殿に頼みがあるのだが・・・」

数秒の沈黙の中結城が口を開く

結城「何ですか？」

オルガ「今この世界は、ここから・・・この世界が消えてしまう」

結城「・・・なぜです？」

その場の空気が一瞬にして静まる

オルガ「昔この世界にシルヴァレスという偽神がいた、その偽神はこの世に眠る神器を使ってこの世を破壊しようとした」

結城「それが？」

オルガ「・・その時その偽神を倒そうとした戦士・・・アルレス、偽神の息子が完全に倒す前にその戦いで戦死してしまった、・・・長い月日をかけて偽神この世に舞い戻った・・・」

結城「それを倒せと・・・・？」

入ってきた時と明らかに雰囲気が違う

オルガ「・・あぁ」

結城「最悪、・・そのアルレスという人と同じ運命に？」

オルガ「・・・あぁ」

結城「少しだけ、考えさしてください、明日間でに答えを出します」

オルガはうなづき、結城は王室を出て行った

俺と魔術と異世界で　第五話「本」

王室から出ると妃が近づいてきた

妃「なんて言われた！？」

結城「なんでもねぇよ、ただ近いうちに帰れるってよ」

・・・・・・嘘だった、身内に死ぬかも知れないとは言えなかった

妃「良かった・・・、じゃあ、部屋をしえてくれたから先に行ってるね」

妃は走って部屋に行った

すると陰に隠れてたゼルトが出てきた

ゼルト「嘘・・・・・・だろ？」

結城「ばれてたか、・・・あぁ、死ぬかも知れないって言われた」

ゼルト「・・・・かもしれないだ！！、絶対死ぬとは限らない！！、大丈夫だ！！」

結城は少し笑って

結城「元気づけてるつもりか？」

ゼルト「一応はな」

結城「は～、・・・なんか疲れた部屋に案内してくれ」

ゼルトは「こっちだ」といって案内してくれた

ゼルト「ここだ」

結城「ありがとよ」

部屋には、ベッド、本、階段、机、、ベランダ、が付いていた

机には三冊の本が置いてあった

神話絶録、武器使い、白紙の本

結城「何だこれ？」

表紙にも何も書かれていない、中にも何もかかれていない

結城「・・、ほかの二冊を読もう・・・」

まずは神話の本

内容は先ほどの偽神の話だった

読んでから3時間気になることが数ヶ所あった

無に作られし想像の武器

鬼神の宝玉

狂気に包まれし美しき悪魔

5人の迷い無き仲間

光と闇の別れ道

結城「これ何の意味だよ・・・・」

これは後で白紙の本と一緒にゼルトに聞こう

結城「今度は武器か・・・」

今度の本はさっきよりは薄く、読みやすかった

結城「なるほど、こんなんがあるのか・・・・」

剣士〜　一般的な職業、硬い防具などに身を守り、攻撃に特化して

いる　～

マジシャン～　攻撃系統や援護式の魔術を使用が可能

ガンマン～　銃やボウガンなどの弾薬式に向く職業　～

聖騎士～　上級職業の一つ　仲間の守り　敵を攻撃する　～

バーサーカー～　狂気を力に戦いを好む　～

階級

ノール　一般的の魔力

シルト　一般的な兵の魔力

バルト　兵長並の魔力

レイト　隊長並の魔力

？

結城「なんだ？、この先が切り取られている？」
綺麗に一ページ切り取られている

コンコン

ゼルト「俺だ入るぞ？」

結城「ん？、あぁ」

ゼルト「置いてあった本、全部見たか？」

結城「見たけどさ、・・可笑しなのが一杯だ・・・」

ゼルト「どれ？」

結城「まず最初に神話、・・これとこれとこれ、・・意味が分かんない」

ゼルト「・・・・これは・・・・俺にもわからん」

すこし黙っていった

結城「？、次は職業の本、階級の所が綺麗に切り取られてるぞ？」

ゼルト「これは王様だよ、この世の何処かに試練の遺跡があって、そこに切り取られた部分があるんだよ」

結城「なるほど、じゃあこれは」

結城は白紙の本を出した

ゼルト「こんな本あったか？」

結城「お前じゃないのか？」

ゼルト「この王国にあったことすら知らなかった」

結城「明日王に聞くか・・・」

メイド「ゼルト様～？」

ゼルト「しまった！！、飯で呼び来たんだ！！」

結城「お前・・・・」

その後広間で豪華な食事を食べて、その日を終えた

俺と魔術と異世界で　第六話「職業」

メイド「結城様～、朝ですよ～」

結城「！？、・・・・あ、・・あぁ分かった・・・」

常人の生活を送ってた結城はメイドに起されるなんて一生ありえること無い事だと思っていた

ゼルト「入るぞ～」

結城「ゼルトか・・・・」

ゼルト「起きてたか、ちっと来てくんね？」

結城「？」

そう言われて着いて行くと、昨日と同じ大広間に着いた

結城「なんかすんのか？」

ゼルト「いや、ただ錬石をつけるだけさ」

出されたのは黒色の石を出した

結城「これ・・なに？」

ゼルト「これは簡単に言うと職業の身分を表す石だな、一応お前は能力的に優れてるから、二つの合錬職業が使える」

結城「つまり、今の俺なら二つの職業になれんのか？」

ゼルトは頷き、錬石を手渡す

ゼルト「どんな職業になりたいか頭でイメージするんだ、服とかも考えろよ、なった瞬間から全裸とかマジ勘弁だぜ？」

結城「服もか！？、まぁいいけどさ・・」

結城は座り考え込む

結城（やっぱ、援護とか攻撃考えるのなら、剣士とマジシャンか・・・、服か・・、どうせ武器も考えるんだろうな・・・・）

ゼルトがじっと結城を見る

結城「黒い服・・・、コートで暑くも寒くも無く重さを感じなくて、着心地がいい奴・・・、上着の想像はできた、今度は下半身か・・、下も黒でいいか・・・、長ズボンでポケットにちょっとした武器も入る奴、武器は・・・・、ツヴァイハンダー・・・・・、重量半減でいいか・・・、杖は一般的のあっちの世界使用にするか」

結城は顔を上げて

結城「できた！」

そういうと体が軽くなり辺りが光に包まれて、ッパっと光が消えた

結城「なんだ？」

ゼルト「ほ～、やっぱ異界の人間は考えることが違うな」

鏡を見ると、服は全部黒、コートには重みが感じられず右足の部分にはコート生地が無く歩きやすかった、ズボンにはナイフ収納や、小剣があった、剣は太刀とも言っていいような重さだった

結城「ふ～ん、いいじゃん」

ゼルト「じゃあ、職業も決まったし、行くか！！」

結城「どこに？、てかさ、今思ったんだけど妃は？」

少しの沈黙でゼルトは

ゼルト「返した、、元の世界に、本当の招かれる者は結城だけだ、それに女性だ危険な目にあわせたくない」

結城「分かった」

ゼルト「まず王室に行こう、渡すものが有るってさ」

結城「渡す物？、分かった」

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

―――――――――――――――――――――

一応本編は終わりなんですけど

自分からの頼みなんですけど、自分でも気を配ってるんですが
もし誤字や日本語になってないところが有ったら感想のところ書き
込んでくれるとうれしいです

俺と魔術と異世界で　第七話「出発」

コン　コン

ゼルト「入りますよ？」

オルガ「構わん」

入ると大きな箱が置いてあった

オルガ「ん、武器も既に作っていたか、どれ貸してみろ」

結城「どうぞ」

ゼルト（あ、アレをやる気か・・・・・、ご愁傷様、結城・・・・・・）

オルガは剣を手渡されると、刃の部分に布を被せ、両端を握り、曲げ始めた

結城「な！？、何をする気だ！？」

ミシ！！、ミシミシ！！！

オルガ「フウウウウゥゥゥゥゥ！！！！！！！」

剣は悲鳴を上げて、オルガは普通の人間ならありえない様な力で剣を折ろうとしている

ミキ！！！、ビシッッ！！！

ひびが入った・・・・

メキメキ！！、バシィィン！！！！！！！

結城「うわぁぁぁ！！！！！！」

剣は真っ二つに折れ使い物にならなかった、そしてオルガは汗を流し

オルガ「ふぅ、・・・こんな軟弱な武器は使えないなぁ・・・」

ゼルト（嘘だ・・・・・・、絶対嘘だ・・・・）

結城「嘘だろ！！、現に汗ダラダラじゃねぇか！！」

オルガ「折れた物はしょうがない、これを渡そう」

出したのは持ち手が一風変わった剣である

結城「・・・・・何これ？」

オルガ「ここから出る者への贈り物のような物だ」

ゼルト「というよりもまずどこに行ったほうがいいでしょうか？」

確かに、これといった手かがりは無い

オルガ「まずは・・隣町に入ってはどうだ？、そこの何処かに有力なガンマンが入るそうだ」

結城「分かりました・・・」

オルガの適当な返答にゼルトは少し呆れていた

結城「なら早めに行きますね」

オルガ「まぁ、それもいいだろう、では無事帰還願う」

二人はその部屋を出て隣町に向かった

俺と魔術と異世界で　第八話「屋敷」

結城「・・・はぁ～」

オルガから貰った剣を見てため息をつく

ゼルト「・・・さっきから何回目だよ・・・・」

結城「２４回・・・」

ゼルト「数えんなよ・・・・・」

カサカサ

結城「ん？」

ゼルト「なんだ？」

出て来たのは何か分からないプルプルした奴

ゼルト「ジュルか～、和んでると攻撃されるぞ～」

結城「へいへい（和みはしないけど俺たちの世界で言うスライムか？）」

結城が攻撃していると、ある悲惨な出来事が・・・・

ゼルト「これでトドメ、大丈夫か結城・・・、・・・・・・・・?」

結城「大丈夫だけど?」

ゼルト（いやいや・・・、もう剣にひびが?、なんかの飾りだよな・・・?）

ゼルト「ちょっと剣貸して」

結城「?、いいよ」

ゼルトが剣を指でなぞる

ツー・カリッ・ツー・カリッ

ゼルト「結城・・・・、残念だったな・・・・」

結城「え!?、な・なにがだよ?」

ゼルト「上から弱気で殴ってみ」

結城は何がわかんないまま、弱気で殴った

バキン！！！

結城は口を開けたまま呆然としている

ゼルト「剣の刃に大きな亀裂があった・・・・」

結城「・・・・・え？、てか・・・・・俺どうやって戦うの？」

ゼルト「隣町に直行だ、走れ！！」

結城「なんつう強引さ・・・・」

そしてかなり走り、隣町も見えてきた

ゼルト「はぁ・・・、やっと着いた」

結城「てか・・・はぁ、・・・・俺の・・・武器・・・・！！」

二人とも相当息切れをしている

ゼルト「武器なら買える・・、金は王から貰った」

結城「じゃあ、武器や行こうぜ」

ゼルト「言われなくても行くさ」

そして武器屋に行き並んでいる武器を見る

結城「これいいな！」

そこにあるのは手ごろなサーベルだ

ゼルト「店主！！、これをくれ！」

奥から店主が出てきた

店主「ん、それかい？、それは１５００レットだよ」

ゼルト「ほらよ、・・・・ところで此処に腕利きのガンマンがいると聞いたが？」

店主「あ～、そりゃアッシュですね～、ちっと前にここから少し離れた館に魔物狩りだ～、とか言ってましたね～」

ゼルトが何かに気づいたようだ

ゼルト「ん？、確かそれって、・・・・吸血鬼が出るって言う」

結城（吸血鬼ってこの世界にもいたんだ・・・・）

店主「そうです、結構こっちも困ってんですよ・・、あそこの近くに好い鉱石が取れるんですが、取ってくる奴らが怯えて・・・、たまに行く奴もいますけど帰ってこなくて・・・」

ゼルト「分かったありがとな、結城これ」

結城「・・ん?、あぁ、ありがと」

そして、準備も整いその場所へ行くことに

結城「もしかしてアレか?」

ゼルト「そうだろうな」

着いたのは大きな屋敷だった

俺と魔術と異世界で　第九話「仕掛け」

ゼルト「入ってみ・・・・る？」

少し後ずさりをしているゼルトが冷や汗をかいて言う

結城「正直こういうところ好きじゃないんだよ・・、それに行かないとどうしようもないし」

そう言って結城が館に入る

ゼルト「・・・・床が彼方此方抜けてやがる・・・・」

キィィーーーーー・・・・・・・バタン！！！！！！！！

結城「・・・・・・？」

ゼルト「・・・・・・？」

二人は扉を見て少しの間動かなくなった

ゼルト「・・・・・魔力防壁の裏か・・・・」

結城「・・・なにそれ・・、開かないんですけど、これ」

結城が扉を引いたり、押したりする

ゼルト「無理だ、魔力防壁っつうのは表からの生き物の侵入を封じるんだ、これはそれの逆版だ」

結城「じゃあ、こっから出れないの？」

ゼルト「一応この形状は一番古いから、どっかにある核を破壊すれば消えるな」

結城は少し考えて

結城「それって勝手に起動する物なのか？」

ゼルト「絶対魔力を加える媒体が無いと発動しないんだ、杖だけじゃ魔法は出ないだろ？」

結城「・・・・それって悪い方向に考えると・・・・」

二人の顔は青ざめてきた

ゼルト「こんな所いたくない・・・・よな？、な？」

結城「ささっと、終わらせようか・・・・・」

先に進むと長い通路に出る

結城「・・・・・・・・・・」

ゼルト「・・・・・・・・・」

結城「・・・・・・・・・・・」

ゼルト「・・・・・・・」

長い・・、やけに長い

結城「もしかしたらさ・・・」

結城がゼルトに習ったファイアを床に放つ

ズドォン！！

これほどの音がしても床は壊れずに焼け後が残る

そして山彦のように奥から音が帰ってくる

結城「やっぱり・・・・・」

さっきの焼け跡があるはずの無い先の廊下についている

ゼルト「なるほど、・・・ん～」

ゼルトが何かを探し始める

結城「なに探してんの？」

ゼルト「核があると思うんだ、ある意味ここはカラクリ屋敷だ、仕掛けはある筈だ」

そういうと結城は壁の辺りを探し始めた

一部壁の色が薄いのに気づく

結城「外れた？、奥になんかある・・・・・・・」

光っているダイヤの様な物

ゼルト「それそれ！！、こうするんだよ」

バキ！

核は鈍い音を立てて割れた、そして奥に扉のような物が見えてくる

中に入ると牢獄の様になっていて中に誰かいた

ゼルト「・・・・あいつは・・・・・・」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6226g/

俺と魔術と異世界で

2010年10月8日11時18分発行